

# 「半布里」 にっぽんど真ん中祭り優秀賞!

念願の



迫力ある演舞。今年は「ライン下り」と「高山まつり」がテーマ。



受賞の知らせに、思わず涙。飛び上がったり、抱き合ったり、みんな最高の笑顔!

9月30日午前8時20分、富加町半布ヶ丘グランドで国体プレ競技「グラウンドゴルフ」の開会式にも踊ります。ぜひ見に来て下さい、とのことです。



(写真提供:野中治さん)

## 私もT子さんに

富加町高畑 渡辺 由美子

私が関高校を卒業したのは一九六二年で、ちょうど五十年経ちました。

「私達も女子会をやりましょう」  
東京在住のクラスメートCちゃんが提案してきました。彼女は、今は元気に生活していますが、病後で食事に気をつけていて、なかなか岐阜へ帰省できずにいます。時々開かれる同窓会にも顔を出せないので、ゆっくり話したいようです。我々六組の女子は高校二年三年とクラス替えがなかったから、青春時代の二年間を共に過ごし、二十二名で卒業しましたが、二年生の一学期当初は二十三名でした。T子さんが二年生の一学期中間テストを終えた直後に、家庭の事情で、東京へ引越されたからです。



そのT子さんとCちゃんに、大阪、名古屋、岐阜からの六名が加わって、湯河原の公共の宿に集合しました。計画から実行まであまり時間がなかったし、遠方に嫁いでいる人や、介護などで家をあけられない友もいて、参加者は少人数でした。でも、部屋に案内されたときに、六十八歳のおばあさんたちは、一足跳びに十代の少女に戻りました。まず、五十一年ぶりの再会となったT子さんの転居後の苦労話に耳を傾けました。上京したものの、すぐに都立高校への転入学がかなわず、いったん私立高校に籍を置いて編入学試験に挑戦し、見事合格してようやく都立青山高校生になれたこと、経済的な理由で大学進学を断念せざるをえなかったけれど、得意の英語を活かして、

国際線のスチュワーデスの職を得たところまで、一気に話して下さいました。拍手をしながら、胸の奥から熱いものがこみあげてきて、私はあわててハンカチを取り出しました。  
逆境に負けずに自分の道を切り開いていったT子さん。重い病気にかかって、さらに医師の誤診にも屈せず、医療裁判をおこして勝訴し、絵画に没頭しているCちゃん。ご主人の建築事務所で、今も経理を担当し、時には測量にも出かけるNさん。腰痛を克服しようとした水泳を長く続けてシニアの全国大会にも出場するKちゃん。ギフチョウに魅了されて、野山を歩き回り、その保護活動にも熱心なMさん。ダンスを続けて、いつまでも若々しいSちゃん。そして紙粘土でメルヘンの世界を表現し、カルチャーセンターで教えるほどの腕前のKさん。それぞれに歩んできた五十年間の人生を  
私も三十八年間に会った高校生との悲しく辛い体験などもうあけて、夜が更けるのも忘れていました。二十三名のうち二名は既に永眠されましたし、様々な事情で参加できなかった同級生を思いながら、気取らず、ありのままの自分の姿を見せあうことのできる友の存在は、何物にも替えられない宝物だと感じました。  
術後で小食なCちゃんとMさんにひきかえ、富加町の健康診断後に保健師さんに呼び出されて、体重と歩数の記録表を渡され「半年間で5キロ減量してください」と注意を受けているにもかかわらず、私は出された料理を完食してしまって、ちよつと後悔しました。明日からは節制して、次の女子会にも元気で参加しようと思いをたて、帰途につきました。

